

子供研究試論

——時代の変化と子供世界——

佐 藤 良 吉

目 次

(1) 子供世界の変貌(一)子供世界の変容(二)変化への視座 (2) 子供世界の変遷(一)大人だけの時代(中世)(二)子供性発見の時代(近世)(三)準備の時代(現代)(四)子供世界の危機 (3) 家族のいない家庭の時代(一)核家族家庭(二)単身赴任家庭(三)離婚家族家庭 (4) 子供世界の病理(一)病理の時代(二)準備時代の病理(三)学校教育の病理(四)子供と生活

(1) 子供世界の変貌

(一)子供世界の変容 アメリカの女性ジャーナリスト Marie Winn は、現代アメリカ社会における子供世界の変貌ぶりを、著書「子ども時代を失った子供たち」(「Children without Childhood」平賀悦子訳)のなかで、つぎのように述べている。

かつてナボコフの「ロリータ」という小説に、アメリカ人の繊細な感情はひどく傷つけられたものだった。ニューイングランド出身で12歳になる少女、ロリータ・ヘイズが、ヨーロッパのインテリ中年紳士、ハンバート・ハンバートと夜をともにする物語であった。アメリカを震撼させたのは、子どもを相手にした中年紳士のセックスを描こうとした作者の発想ではなく、むしろロリータ自身であった。ハンバートと出会うずっと以前に処女を失い、セックスを知りつくしうんざりしている12歳のロリータに、アメリカ人は何か脅威を感じ、背すじの寒くなる思いをした。「ロリータ」はボストンで発禁となり、格調高い書評で知られるニューヨーク・タイムズ紙までが、ナボコフの作品を「不愉快きわまりない」「胸の悪くなるような小説」とこきおろした。ところが「ロリータ」の発行後わずか30年ほどしかたっていない今、すでにナボコフが将来の子ども像を予言していた

かに思える状況になっている。1980年代の小、中学生は、明らかに、かつての子ども像からナボコフの描いたセクシーな少女像へと近づきつつある。子どもといえはあどけなく、無邪気で、人を疑うことを知らない連中で、ひざをすりむき、かかとの低いぴかぴかのエナメル靴をはき、髪の毛をビッグテールにしていたのは、もう過去の話である。子ども時代のさまざまな楽しみも、様変わりした。諷刺雑誌「ナショナル・ランプーン」を見ると、一世代前の子どもならば、たいてい土曜日の午後には「建築現場であちこち探険したり、ガレージの屋根から古いソファめがけて飛びおりたり、野生のりんごで戦争ごっこをしたり、芝刈機を押したりして」遊んでいたとある。ところが今の子どもの日程表をのぞくと、「朝寝坊—テレビをみる—テニスのレッスン—商店街へレコードや新着のビデオゲームを買いにい—第二次世界大戦のビデオゲームをやる—テレビをみる—マリファナや酒をやる」となっている。昔、子どものふくらんだポケットに入っていたのは、「ナイフ、コンパス、36セント、ビー玉、お守りのうさぎの後ろ足」であった。一方、今の子どものポケットには、「マリファナ用パイプ、ポップ・ロックのカセット、コンドーム、20ドル札、たばこのメリット」が入っている。

子ども像も様変わりした。演劇新聞の1ページ広告には、口紅もアイシャドーもこってりぬりミンクのコートをはおった女性が堂々と登場し、「わたしがまだ10歳だなんて、信じられる」と、いわんばかりの顔をしている。いや、それが10歳の少女であっても不思議はない。現に子どもが早熟なのはショービジネス界にかぎらず。ごく当たりまえの平凡な子どもたちの場合でさえ、かつては少年少女として、はっきり大人と区別されていた年齢層が、今では外見も行動も大人びているからである。どういうわけか、今は、かつて子どもの世界と大人の世界を分けていた明確な境界線がぼやけてしまった。また、幼い子どもが大人の世界へ足を踏みいれたり、現実を知って悲しい思いをしたりすることのないように保護していた被膜がどういうわけか弱くなってしまったのである。アメリカ中どこでも、離婚した母親が子どもにいうセリフは、きまり文句になっている。「もう、今までとは違うのよ。なんでも母さんといっしょ、お互いによきパートナーにならなくちゃね」と。子どもは子ども、親は大人という家庭における伝統的な上下関係が崩壊すると同時に、今日、大多数の子どもたちをとりまく状況ががらりと変わり、今までとは違って親子のあいだにパートナー意識が芽生えている。

この本書の冒頭の書き出しは、現代アメリカ社会における子供世界の様変わりぶりを、あますところなく伝えているという点で衝撃的であり、また時代の変化に伴う、子供世界の危機の予兆を暗示しているという意味できわめて示唆的である。たしかに今日、上掲 Marie Winn の指摘にもある

ように、子供世界はかつてない変化の波に翻弄されている。そのことは例えば同じ Marie Winn が、かつての時代の子供世界と、今日みられる子供世界の一面を、「子供時代を失った子供たち」(「New York Times Magazine」所載、上野千鶴子訳)のなかで、両者対比してつぎのように述べているのを見てもわかる。

そんなに遠くない昔のこと——五月の第二日曜は、今とはずいぶんちがった母親像のために祝われたものだった。今の親たちが子供だったころ、母の日は、ミルクとクッキーを用意して学校帰りを待っている、家庭的な女性のためのものだった。今の親たちの子供時代には、母親が離婚して片親になるなんて、炭鉱婦になるのと同じくらい信じられないことだった。今は昔、子供と子供時代についても、同じくらい今とは違ったイメージが保たれていた。子供たちは少なくとも「恐るべきティーンエージャー」になるまでは、無邪気に遊びまわる子供っぽいもので、特別な保護を必要とすると思われていた。親たちは、子供時代を心配ごとのない「黄金時代」に保とうと一生懸命だった。ところが今日、六歳以上の子供を持つ女性の三分の二が働きに出かけ——なかには実際、鉱山で働いている女性さえいる——二組の夫婦のうち一組が離婚する時代には、子供にとっても決定的に違った状況がおとずれている。子供たちの日々の行動、言葉づかい、知識、とりわけ大人の世界とのかかわりは一変してしまった。この事実は、数百人に及ぶ四年生から七年生までの子供たちとのインタビューで、ほとんど例外なしに裏づけられた。子供たちがインタビュアーに見せたさりげなさや落ち着きは、彼らが実際に言ったことと同じくらい如実に変化を示していた。十年か二十年前の親なら、彼らのマリファナ、セックス、有線テレビのポルノ映画についての証言に、深いショックを受けたことだろう。子供につきもののはにかみや無口さは、子供服や礼儀作法もろとも消え去ってしまった。

Marie Winn は以上このような子供世界の変貌の動因を、第一には今日、かつて大人が子供を子供自身として認め、適度に子供を保護した子供保護の時代から、大人がひたすら子供を大人世代へと駆り立てる、大人へまでの準備の時代に移行した結果であると指摘する。このことはいいかえれば、今日この時代というのは、大人が子供に子供自身であることを許さなくなった時代、あるいは子供を中心にみれば、子供が子供として自分の場席を失くしてしまった時代、つまり子供時代を見失った子供性喪失の時代とい

うことになる。Marie Winn が今日この時代の子供を特徴づけて、「子供らしさを失くした子供たち」とみているのもこの意味でうなづける。

(二)変化への視座 このような Marie Winn の子供世界の変化に対する視座のなかには、いうまでもなくAriésの著書、「子供の誕生」(「L'enfant et la vie Familiale sous L'ancien regime」杉山光信訳)の影響が、著しく十二分に反映されていることはいうまでもない。そのことは例えば「黄金の子供時代」あるいは「子供性世界の発見」が、ともに近世以降の時代的所産であるとするなど、時代における変化の背景からみた歴史認識の仕方をみてもわかる。いずれにしても Marie Winn は Ariés の場合と同じように、今日この時代における子供世界の変化を、中世から近世、そして往年の脱近代へという、きわめて長い歴史の視座からとらえ、今日の子供世界の変化の深層に目をむけていることは確かである。事実、このような長い射程の歴史の視座から、あらためて子供世界の今日的様変わりぶりに目をむけなおしてみれば、かつての時代の子供世界のありようも、今日あるいは今日以後の子供世界の変化の未来予測も、ともに時代の変化の背景とのかかわりのなかで納得させられる。

(2) 子供世界の変遷

(一)大人だけの時代(中世) 上述このような歴史の視座を手がかりに、まず西欧中世期社会における子供世界に目を注ぎなおしてみると、この時代はいわば子供(年少者)独自の立場がまだ認められていない、その意味で大人だけの大人世界の時代として特徴づけられる。このことはいうまでもなく、この時代にいわゆる子供(年少者)がいなかったということではもちろんない。大人と子供の間、互いの年齢差や身体的特徴の違い、あるいは生活の仕方やものの考え方、または感じ方などに、何んの差異も区別もなかったという意味でもない。当然のことながら当時においても、今日どこにでも見かけられる、大人と比較して小さくて幼なく可愛らしい年少者が、

到るところに、いたことに変わりのあるはずがない。しかしそれにもかかわらず、この時代がなお大人だけの子供のいない、大人世界の時代としてみられるのは、この時代には子供を子供自身としてみる、子供に対する大人の観念が、十分成熟していなかった時代ということを指している。いってみればこのことは、この時代には子供を子供として、大人から区別する大人と子供の間の障壁、あるいは境界のなかった時代ということになる。

事実、当時においては、大人と子供(年少者)の間には、生活のうえでも、仕事(労働)のうえでも、ともに双方を区別する境界は存在していなかった。つまりこの時代においては、仕事(労働)を中心にみれば、大人も年少者(子供)もともに、仕事(労働)を分けあう労働の分担者であったのである。いいかえればこの時代には、労働生産力の確保という点でみるかぎり、年少者(子供)もまたりっぱな労働力の荷い手であったということになる。以上このことは例えば当時の仕事(労働)を中心に、生活の事実にも照して考えてみればわかる。いうまでもなく当時の農耕生産社会においては、労働(農耕)が生産の第一手段とされていた。人びとは誰でも手足を動かし、農耕労働に従事することによって、農耕生産をあげるほかなかったのである。このような農耕労働はもとより、大部分が大人の仕事ではあるが、他方年少者(子供)もまた大人が労働に従事するのと同じように、応分の仕事(労働)を分けあう必要があり、またそれが可能でもあったのである。これを子供の側からすれば、子供もまた大人と同様に労働(仕事)に従事することを、大人から求められていたということになる。このことは見方をかえていえば、大人が生産労働に従事する大きな大人であるとすれば、年少者(子供)もまた応分の仕事を分けあう、小さい大人の一人であったということになる。以上この点労働力の確保ということを中心にみるかぎり、この時代がしばしば大きい大人と小さい大人(年少者)、つまり大人だけの時代であったといわれる理由もうなづける。

上述このような労働分担上の有様は、さらに当時の仕事の実際に照して、

例えば農耕や田畑づくり，播種や育苗あるいは農作物の世話や収穫時の様子を想像してみればわかる。いうまでもなくこのような生産労働(仕事)は，いずれも大部分が，大人でなければなしえない仕事であることは事実である。しかしそうはいっても当時，小さい大人(年少者)がなす仕事(労働)が，何一つなかったということにはならない。例えば軽い仕事(労働)，農作業や田畑づくりの補助，あるいは播種や育苗の世話，そのほか収穫や家畜の飼育の手助けなどは，小さい大人(子供)にとって，もっとも適した労働(仕事)の一つであったはずである。このほか大きな大人と分けあう生活のなかの雑事雑用は，日常かぎりなく存在していたはずである。このように往昔における生産の手段，方法としての労働作業を中心にみて，大人と小さい大人(子供)の分けあう労働(仕事)の有様を考えると，そこには労働の分担者としての子供(年少者)はいても，今日一般の通念での子供は，いまだ大人の共通の認識とはなっていなかったことがわかる。

事実，小さい大人(子供)が大きな大人とともに，日常応分の仕事を分けあっていたことは，西欧中世期社会の場合にかぎらず，わが国においても同じようにその例は数多くある。農繁期や収穫期における労働や農作業の手伝い，子供の子守りや家の留守番，そのほか日常生活のなかでの使い走りや雑事雑用の用足しなど，中世期年代社会だけでなく，近世以降の場合においても類例は多い。そのことは例えば加藤秀俊「子どもの文化史」所載，つぎの引用をみてもわかる。

おとなと子どもという二分法が無意味であったもっとも重要な理由は，子どもという名でよばれている人間のグループがかつての社会では重要な生産労働力の担い手であったという事実である。……事情は日本でもおなじである。秋田県や山形県の山村をおとずれて現在七十をすぎた老人たちの話をきくと，かれらはほとんど異口同音に五，六歳のころからカマをもって近くの山に朝露をふんでのぼり，馬の飼料となる草刈りを春から秋にかけての日課としていたというし，また女性のばあいにはまさしくサモアのごとくに，六，七歳のころからおさない弟や妹のめんどうをみることに忙殺されていたという。農繁期になれば，労働と生産

の単位としての家族は総動員で野良仕事にでかけ、子どもたちも稲刈りに一日じゅう汗をながした。俗に「描の手も借りたい」というようないそがしさが日本の農村社会を支配していたのである。「子ども」だからといって特別扱いをされることは、ついこのあいだまで日本の農耕社会のなかには存在していなかったのだ。だれでもが働く。そして、子どもも身体の運動器官がいちおうととのったところで、即座に労働力の一部に算入されていたのであった。

このような農村の慣行は現在でも多少、残存している。たとえば、長野県などのばあい、小学校の学童たちは通常いう意味での「夏休み」があたえられはするが、その期間はきわめてみじかい。そのかわりに秋の収穫期におよそ二週間ほどの「秋休み」が用意されているのである。耕うん機やコンバインの普及したこんにち、農家の労働のなかで子どもがどれだけの貢献をなしうるか、またなしつつあるかは、大いに疑問だが、しかし、こうした「秋休み」というものの存在はついこのあいだまでの日本の社会が子どもを労働力として必要としており、またこの労働力を抜きにして農耕生産が不可能であり、したがって生存も不可能であったということを物語る。つまり、子どもが生産という行為のなかから排除され、あるいは不必要とされるようになったのは、ごくあたらしい世相であったのである。民謡としてよく知られている「五木の子守歌」なども、こういう視点から見ると、こんにちの基準からすると信じがたいほどの貧しさと労働不力の反映であったとみてさしつかえない。じっさい、熊本県の人吉盆地などで話をきいてみると、盆地での農繁期にあまりにも労働力が不足であったがゆえに、すぐ裏手の山にあたる五木村から少女たちが子守にでかけてきて、人吉盆地の米作農家を手助けしていたということを古老からおしえられる。「五木の子守歌」というのは、このように人吉盆地に山からおりてきた少女たちが望郷の念にかられてつくったわらべ歌をその原型にしており、べつだん彼女たちは五木村の村内で子守をしていたのではなかったのだ。女の子が子守にでかける、ないしは奉公にでかけるというのは、べつだん五木や椎葉のような山村にはかぎらなかった。それは日本の各地に共通するごくあたりまえの慣行であったのである。

このようにみてくると、かつての農耕生活を中心とした古い時代においては、生産労働力の担い手としての小さい大人(子供)はいても、今日の通念での子供は、いまだ人びとの時代の認識とはなっていなかったことがわかる。この意味でこの時代がしばしば大人だけの時代、子供意識のまだ十二分に成熟していなかった、子供不在の時代といわれる理由も理解できる。

(二)子供性発見の時代(近世) 上述このような大人だけの中世期社会を経て、

十八、九世紀近世に至ると、子供世界もまた時代に伴う変化のなかで、大きな転換期を迎えることになる。つまりこの時代いわゆる近世期は、産業化社会段階の初期にあたる。このかつて人びとが経験したことのなかった産業化社会の出現が、これまで農耕社会に定着していた、大きな大人と年少者とが、ともに互いに共有していた一つ世界を、大人は大人、子供は子供という二つ世界に分断することになる。時代の変化が否応なしに、結果的に年少者を大人世界から区別し、小さい大人を小さい子供だけの子供世界に追いやることになる。近世期産業社会は、生産手段の性質上、大人の労働力は必須としても、年少者(子供)の労働力は必要とはしなくなった結果である。このような時代の変化は、拒むことのできない時代の趨勢として、大人と年少者(子供)との間に画然とした障壁をつくり、年少者(子供)は必然的に子供だけの子供世界に、大人世界から隔離されることになる。いってみれば大きい大人と小さい大人(年少者)との間に区別が生まれ、以後年少者は大人とは異なる子供自身として、子供という子供の名でよばれるようになったということである。これをまた一つの大人世界から、新たな子供それ自身の世界の出現、つまり子供世界の誕生、あるいは大人による子供性世界の発見とみても同じことになる。

このようにして時代の変化は、大人世界から小さな子供世界の独立、あるいは子供性世界の発見という近世以降の子供観の胎頭を促し、他方これに伴って、大人が子供を子供として保護する子供性保護の思想をも醸成した。この意味でみるかぎりこの時代は、一つの大人世界からもう一つの子供世界誕生の時代、あるいは子供世界発見の時代、またはこれに伴う大人による子供保護思想の萌芽期として特色づけられる。いずれも時代の変化が、新しい子供世界の誕生、あるいは子供世界発見の方向へと導き、子供保護の保護思想をも、併わせ醸成することになった結果である。この時代が前出 Marie Winn もしばしば指摘しているように、子供が子供自身の子供世界をもちうるようになったという意味で、「黄金の子供時代」といわ

れる理由も十二分にうなづける。

(三)準備の時代(現代) 以上このような時代を経て今世紀に至り、とりわけ六十年代以降における時代の変化は、大人と子供世界を直撃してその様相を一変させた。その第一原因は、ひとがこれまでかつて経験したことの無い、超高度技術(産業)社会と、それに伴う情報化革命社会の出現ということにある。この時代の変化に伴う社会のありようが、大人と子供世界に衝撃をあたえ、その根底を激しく揺り動かす結果になった。そのもっとも大きなあらわれの一つは、かつての時代、大人と子供世界を適度に区別していた両者の間の障壁、あるいは境界がなくなり、そのため大人と子供が、ともに一つ世界のなかに混在、混住するようになったことである。

このことは比喩的にいえば、子供は子供世界というかつての自分自身の場席を見失って、大人世界という錯雑社会のなかに漂流しはじめた有様にもなぞえられる。以上の事実はまた大人の側からすれば、大人がかつての時代、子供を子供世界に隔離することによって、子供を大人の錯雑社会から保護してきた保護の姿勢あるいはその手がかりを失って、大人もまた混迷錯雑の渦にまきこまれはじめたことを意味している。この結果大人は大人で混乱し、子供は子供で大人の適度な保護の手助けなしに、むき出しのまま大人の錯雑社会に駆り立てられることになる。それはちょうど子供が子供世界という自分の住み家を追われて、大人世界という異質世界にさまよい出たみなし児の有様にも似ている。

事実、今日、子供は家庭や学校をふくめたあらゆる生活の場で、大人の適度な保護の手がかりなしに、素肌のまま時代の変化の直撃に身をさらしている。この意味でみれば、今日の時代ほど子供にとって、大人からの頼り甲斐ある保護の手立ての期待できない時代はないともいえる。たしかに今日この時代ほど大人の間に子供保護の意識が、希薄になりつつある時代もまた少ないということも事実である。これが時代の趨勢であってみれば、このような時代の変化を反映するように、子供世界も潤いのない荒み切っ

た方向に変わりはじめたとしても仕方ないことである。いずれも親や学校の教師をふくめた大人が、時代の変化の渦のなかで方向を見失い、子供の自然本性保護の意識や保護の方法を放棄してしまった結果である。こうして今日、大人や親はいうまでもなく、学校の教師すらもが、子供の側からすれば、子供とは縁遠い無力な存在に転落しはじめている。このことは大人の側からいえば、大人が子供がわからなくなり、親が子供が見えなくなり、学校の教師でさえ、子供を見失いつつあるという事実にも通じている。以上この意味でいえば、今日の時代は子供がますます子供らしくなくなり、親が父母でなくなり、学校の教師もまた学校の教師らしくなくなりはじめた時代であるともいえる。このことはまた子供は子供で、いっそう子供の自然を失くし、親や教師をふくめた大人は人間らしさを失って、否応なしに子供を置き去りにするほかない、いわば大人と子供世界の混迷波乱の幕明け時代とみても同じことになる。そのことは上出 Marie Winn が、前出同書のなかで、つぎのように述べているのをみてもわかる。

昔ならば、人生の黄金期といえる子ども時代に、小学生のわが子が家庭の外で深刻なトラブルに巻きこまれはしないかとやきもきする親は、あまりいなかった。たとえ意地っぱりで独立心の強い子であっても、手綱を握ってさえいれば親は安心しきっていたものである。子どもが幼い心を痛めるのは、野球のボールで窓ガラスを割ったときとか、学校のテストでひどい点をとったときとか、最悪の場合ですら、映画館に忍びこんでただ見をしたとか、棒菓子を一本くすたとかいう程度のささいな悪さをしたときぐらいだった。一方、親の側も、息子や娘が大学へ進学しないのではないかと、大統領をめざすほどの意気込みに欠けるのではないかとといった問題で頭を悩ましてはいたものの、病気や事故など不可避な心配事を別にすれば、わが子の日常生活は順調そのものだとして固く信じていたものである。…それに比べて今日では、家庭を離れるまでまだ数年間かかるという子ども時代の半ばから、子どもは家庭内で無気味な存在となり、幼いわが子ですら、危険や悪事、さらには法にふれる行為にまで巻きこまれかねないのだと、親は思い知らされる。現在では、子どもを部屋に閉じこめたり、「よその子の家へ行ってはいけない」などと、およそ地域社会の基準に合わない厳しい規則をわが家に設けたりすることはあまりしなくなった。親は、勝手放題にふるまうわが子をとめる手だてなどないに等しいと、観念してしまっている。よその子も許されているとな

れば、なおさらのことである。ところが、どここの親もわが子の生活管理をもてあまし気味なのが現状である。早熟という虫は、どこか毛じらみに似てうつりやすいらしく、優等生たちまでがその犠牲者となっている始末である。子どもたちを待ちうけている子ども時代は、時として恐ろしいものになりかねないのだと知らされれば、親は前途に不安を感じないではいられない。今はもう、「知らぬが仏」ではすまされないのである。……自分の子どものころとは大違いで、昔のようにのんきでもなければ安全でもなく、不安だらけの今日の社会を、親はとまどいの目で見まわしている。そしてもう自分には、わが子の生活を危険から守ってやることができないのではないかと不安になる。

事実、仮りにここに子供世界を映し出すスクリーンのようなものがあるとするなら、そこから眺められる子供世界は、かつての時代、子供が子供として、子供らしくすごした「黄金の子供時代」の場合とは著しく異なってみえる。そこに映し出されている子供の映像は、大人世界という錯雑社会のなかで、子供自身であることをすら喪失して、ひたすら漂いつづけていくほかない、おびただしい子供の群れとでもいうほかはない。

今日このような時代に、大人が子供を時代の変化に伴う危険から守ろうとすれば、ひと(大人)も親も学校の教師ですらもが、根本を見失った即時的な対応療法をするほかなくなる。子供の成長(発達)の息の長い射程にあわせて、子供本性を手厚く保護し、子供期の体験を深めて、子供を子供らしく育てることなどおぼつかなくなる。事実、今日、大部分の大人や親や学校の教師さえもが子供になしていることは、ひたすら競って子供を大人世界へと駆り立て、組みこむ準備のための仕事である。いいかえればこのことは、子供を子供世界にとどめて、子供自然(本性)を深め、子供にまで育てること以上に、子供らしさを損う犠牲を支払ってまで、一刻も一瞬も早く、子供を子供でない子供に仕立てる準備をしているといっても同じことになる。一日でも一時間でも瞬刻の早さを争って、生まれると同時に子供世界を駆け抜け、急ぎ足で大人または大人の同伴者に仕向けているといってもいいすぎではない。最近では子供を大人へまで仕向ける準備は、三歳はおろか零歳でも遅いと考えている親や教師はいくらでもいる。零歳や

三歳では何が早やすぎ、何が遅すぎるかなどについて区別する暇すらない。隣近所の子供が水泳教室に行っていると聞けば、自分の子供もやらなければ、他の子供に遅れてしまうに違いないと考えたり、誰かがピアノやヴァイオリンを習っていると聞くと、子供の適性などおかまいなしにお稽古ごとに狂奔する。いつ (when) 誰が (who), どこで (where) 誰に (whom) 何を (what) どんな方法 (how) で、何んのため (why) に教え習わせるのかなど、念頭におく余裕はどこにもない。ただむやみに、ひたすら子供を準備の方向に駆り立てている例は、日常けっして珍らしいことではない。

このことは子供の側からすれば、子供は好むと好まざるとにかかわらず、子供らしさ(本性)を放棄してまで、大人あるいは擬似大人へまでの準備を急ぐほかないということを意味する。今日、しばしば前出中世期年代大人社会の場合とは異なった意味で、子供と大人世界との境界のない、大人だけの大人の時代の再来、つまり子供が子供時代をもちえない、大人だけの時代といわれる理由もうなづける。こうした時代の変化を背景に、子供はいっそうますます、際限のない大人へまでの準備を急がされている。上出 Marie Winn がそのことを前出同書のなかで、今日の時代を子供保護の時代から、大人へまでの準備むき出しの時代に移行したとして、つぎのように述べているのも当然のことといえる。

これから子どもはどうなるのだろうか。世の中があまりにも目まぐるしく変わりすぎるのではないか。……新しい時代の幕開けで、世の中の考え方が変わる過渡期のつねとして、今のわたしたちは抵抗感と不安感に悩まされている。今日の大人自身、たいていは「あのなつかしき子ども時代」を忘れてしまったわけでもないのに、思い出に残る当時の出来事に、少しも郷愁を感じていない。社会の変化が急激であっただけに、考え方も行動も実際にはまだ大きく変わりつつあり、新しいものがしっかりと定着し、理解されるようになるのは先のことである。その現状さえ、大半の大人がほとんど認識していない。子どもに対する社会の姿勢が変わったことが、問題の核心となっている。子ども時代を人生の黄金期とし、子どもが人生の浮沈とは無縁に、無邪気なままのんきに暮らせるようにしてやろうと、昔の親は懸命だった。これに対して、複雑化する一方で収拾のつかなくな

った今の社会を生きぬくには、幼いうちから子どもに大人の世界を経験させるべきだというのが、新時代の親の対応である。子ども時代は親が子どもを守る「保護の時代」ではなくなり、大人の社会へ入るそなえをする「準備の時代」となった。このように大人が子どもに対する考え方を変えたことが、現代の子どもの生活にあらゆる面で影響を及ぼしている。子どもに対する大人の考え方、姿勢はたしかに中世末期にも一度大きく変化したが、当時も今も、それが重大な意味をもつことに変わりはない。

中世末期まで、子どもは特別扱いされることも、大人と区別されることもなく、ただ、大人のミニチュア版と考えられていたので、子ども時代は、その存在すらはっきりとは認められていなかった。いってみれば、子ども時代と大人の生活とは合併されて一つになっていたのである。ところが、今日では奇妙なことに、大人と子どもを区別しない中世の状況に逆もどりし、子どもを大人の生活に組み入れてしまう傾向が目立つ。子どもに対する姿勢が変わったのは、必要に迫られてのことで、あきらかに大人が子どもの扱い方を改めなければと、慎重に決断を下したからではない。いつの世も、子ども世界の、子どもの生活は、大人の生活を映す鏡である。1960年代末から1970年代初めにかけて、社会は大きく揺れ動き、性革命、女性解放運動が起こり、テレビが普及してアメリカの家庭生活や、育児にますます大きな役割を果たすようになり、離婚と並行して片親家庭が急増し、ベトナム戦争中および戦後の政治は国民を失望させ、経済状況の悪化で働く母親の数が増えた。これらすべての社会変動が大人の生活を変えるにつれて、子どもの扱い方を改める必要が生じたのである。

(四) 子供世界の危機 いずれにしても今日、子供世界はかつてない変貌あるいは、危機のただなかにおかれていることは確かである。今日、子供と大人の目のまえに広ろがりはじめている風景は、大人も子供もいない、仮りの大人と仮りの子供、つまり人間らしさと子供らしさを喪失した、両者混在の茫莫世界の状況に見えてくる。時代の変化が大人と子供世界を直撃し、かつて大人と子供世界を区別していた子供性保護の障壁が崩壊した結果である。しかもその変化は子供世界の表層だけでなく、深層にまでおよびはじめてきている。時代に伴う変化が、子供世界の表層の変化を促すのは当然にしても、同時にまたより深く内層の亀裂をもよびおこす。この意味でいえば今日もっとも重要なことは、子供世界の表層の変化に目を向ける以上に、より深層の危機に、目を注ぎなおしてみることである。今日、しば

しばこの時代を指して、子供世界の危機の時代とよぶのは、子供世界の外層の変化以上に、内層世界の亀裂が深く大きいためといえる。このことはいってみれば、子供世界の深層の亀裂が子供らしさを喪失した、子供でない子供の大量の出現を促しているという意味になる。事実、今日、ひとが大人でなくなり、親が父母でなくなり、学校の教師すらもが教師らしくなくなりつつあるように、子供もまた内層の子供自然(子供性)を喪失して、子供という名の子供でない擬似的子供に転落しつつある。今日、この時代を特徴づけて、子供らしさあるいは子供本性喪失の子供の時代とみても、けっしてそれほどいいすぎとばかりはいえない。いずれにしても時代の変化に伴う子供世界の危機は、子供世界の表層の変化だけでなく、むしろ深く内層(子供性)の崩壊にあることにこそ注意してみる必要がある。

(3) 家族のいない家庭の時代

(一)核家族家庭 今日、大人と子供世界は、上述すでにみてきたように、ともに時代の変化の直撃をうけて、年毎に著しくその様相を変えてきた。これら大人と子供世界にかかわる変化のうち、まず家庭というひとの生活の基本の場所に目をうつしてみても、あまりの様変わりぶりの大きさに誰しも驚かないわけにはいかないはずである。その具体的なあらわれの一つは、最近における核家族家庭の一般化と、それに伴う家族のいない家庭の出現、あるいは小さな家族の大きな崩壊などという事実である。

このような核家族家庭は、とりわけ今世紀後半、六十年代以降の社会変動、つまり超高度産業(技術)社会と情報化社会の出現、これと同時進行した高度経済成長期社会の胎頭と、同じ軌跡線上にあらわれた今日的家族形態といえる。こうした家族は、同年代以降の今日的傾向として、とりわけ都会の場合には、きわめて日常的な時代の趨勢として拡大定着してきた。この点でみるかぎり核家族家庭は、高度産業技術社会と情報化社会、あるいは高度経済成長期社会を背景に、今日的時代変化を陣痛として産み落さ

れた時代の子供ということになる。いずれにしても核家族家庭という家族形態は、今日的時代の所産ともいえるべきものであって、かつて往昔の時代には通常みられない家族形態であった。

事実、例えばかつての農耕生産社会のように、人びとが一定の土地に定着して、大家族で生活をいとなんでいた時代においてはもちろんのこと、近世産業社会初期段階の時代にあっても、今日的時代の核家族家庭はふつうには存在しないはずのものであった。たしかに農耕生産社会あるいは近世産業社会の時代には、生産労働力確保の必要性から、大家族集団家庭形態がより時代の要請に合致していた。この時代においては生産活動上の手段として、ひとによる大量の労働力に依存するよりほかなかったからである。したがってこの時代の場合には、家族長を中心とする、五人や十人の家族家庭は、どこにもみられたごくあたりまえの家族形態であった。これを子供の側からみると、同じ家庭に親としての父母がおり、父母の親である子供からみて祖父母がおり、自分の兄弟姉妹のほかに父母の兄弟姉妹、つまり伯(叔)父や伯(母)もともに混住していたということになる。そのほか少し大きな地主や農家家庭の場合には、作男や下男、商家の場合には、番頭や丁稚などの使用人、左官や大工などの職人家庭には徒弟や弟子がともに住んでいた。このように往昔においては、家族を中心に血族によらない他人までも一つ家庭に混住させ、大家族家庭をいとなむのが通常であったのである。しかもかれらは単に一つ屋根の下に混住していたというだけでなく、年中行事や慣習風俗を同じくし、春夏秋冬の生活感情を併わせ受容しながら、日常の生産(共同)生活をいとなんでいたのである。

事実、家庭ということばの「家」は、いうまでもなく家屋あるいは建物、または居所(すまい)という意味であり、「庭」は樹木や草花の植わっている場所、あるいは泉水などの設けてあるところという意味以上に、むしろ仕事をする空間、場所というのが原意である。いいかえれば家庭とは、ただ単なる建物、家屋という意味ではなく、その家屋の一つ屋根の下で、仕

事(労働)をともにしながら、習俗や習慣をふくめ、生活感情を同じくしつつ、生活をいとなむ場所、空間ということになる。この点でみるかぎり、家庭とはひとの生活のいとなみの場所でこそあれ、ただ単なる建物としての家屋のことでないことは明らかである。いずれにしてもかつての時代においては、家族家庭という同じ一つ屋根の下で、ひとは大人も子供も、互いに生活意識を同じくして、ひととしての生活を分かちあって生きていたのである。これが今日からそれほど遠くない以前にみられた、きわめたあたりまえの家族家庭のありようであったのである。

しかし時代が推移し、今世紀六十年代以降における高度産業技術の進歩、またはこれに伴う超情報化社会の出現、さらに急速な高経済成長期を迎えると、これまでの固定的画一的な大家族家庭のありようよりも、いっそう身軽で流動的流線型家庭が、より時代の変化に適合するようになった。このため上述の年代以降、夫婦の自由確保のための大家族家庭からの離脱志向をも伴って、時代の趨勢として大家族家庭を切りつめた、いわゆる自由確保型、あるいは社会適応型核家族家庭が出現した。この傾向は今日以後時代の社会変化とともにさらに進み、ただでさえ小さい核家族家庭が、より小さな夫と妻あるいは子供とに分断された、つまり個人単位の家族のいない、分断または分極家族家庭として出現するということも考えられる。そのことは例えば Toffler の著書、「第三の波」(「The Third Wave」徳岡孝夫監訳) 所載、つぎの引用をみてもわかる。

もちろん第三の波の到来は必ずしも核家族の終わりを意味しない。それは第二の波によって大家族が完全には消え去らなかったのと同様である。核家族はもはや社会にとって理想型として機能し得ないというに過ぎない。あまり認識されていない事実だが、少なくとも第三の波が最も強くおしよせている米国では、すでに古典的な核家族形態の外で生きている人間がほとんどである。夫が働き、妻が家事に従事し、子供二人のある家族を核家族と定義した場合、どれだけのアメリカ人がこの家族形態に該当するかと尋ねれば、その答えは驚くなかれ、全人口の7%にすぎない。93%は、すでに第二の波の理想モデルにもはや該当しないのである。定義の幅を夫婦共働きの家庭にまで広げ、子供の数を無制限にしても、な

お米国の人口の三分の二から四分の三の圧倒的多数が、これに当てはまらない。しかも、種々のデータによれば（定義をどうひねくろうと）、核家族の世帯数は、他の家族形態が急増する中で、なお減少を続けている。まず目立つのは完全に家族と離れて独りで暮らす単身者人口の爆発的増加である。1970年から1978年の間に米国の十四歳から三十四歳の単身者の数は150万人から430万人へと三倍近い増加を見せた。現在、全米の世帯の五分の一は、単身者世帯である。彼らは、独り暮らしを余儀なくされた敗残者でも一匹狼でもなく、多くは熟慮のうえ、一時独り暮らしを選んだのである。シアトルのある女性市会議員の秘書は言う——「理想の相手が見つければ結婚を考えてもいい。でも、そのために仕事をやめることはしないでしょう」。それまで彼女は独り暮らしである。彼女のように、家庭を早く離れても結婚を先に延ばす若い成人の一大集団が発生しているのを、国勢調査専門家アーサー・ノートンは「移行生活期」が「ライフ・サイクルの中で一般に受け入れられつつある」と説明する。

年輩層に目を移すと、過去に結婚経験はあるが、ただいま結婚中休みの独身、そして結婚肯定派という人が多い。こういう集団の発生が単身者文化を開花させ、単身者向けのバー、スキー・ロッジ、旅行ツアー、その他のサービスや商品が盛況を誇っているのはご承知のとおり。同時に不動産業界でも、単身者専用のマンションを開発し、小型アパートや部屋数の少ない郊外住宅の需要に応えようとしている。今日、米国の住宅購入者の五分の一近くは単身者である。……混乱と激動の陰で多様な家族形態、およびさらに多種多様な個人の役割を基盤とする第三の波の新体系が形を整えつつある。家族形態の非マス化（非画一化）は、個々の人間に多くの新しい選択の可能性を与える。第三の波の文明は各人を無理無体により、自己の必要に合わせた家族スタイルないしは一連の家族形態を選択し、またはつくり出すことを可能にするだろう。

核家族家庭は上述このように、第一に今世紀六十年代以降、超高度技術産業化社会の到来を契機に、社会適応機能中心型家族家庭に対する社会要請と、併わせて夫婦が夫婦単位の自由確保をめざした、大家族家庭からの離脱志向を背景に出現した。しかしいずれの場合でも、核家族型小規模家庭は、時代の社会変動や夫婦(大人)の側の自由確保は充足されても、子供からの視点は置き去りにされがちになる。いずれにしても核家族小規模家庭が時代の趨勢として定着し、父親(夫)は仕事のために日夜家を空け、母親(妻)は余剰時間を常勤または時間給で仕事をもつことになれば、家庭は

家族のいない空洞化された家屋ということにもなりかねない。

家庭はいうまでもなく、建物としての家屋ではなく、一つ屋根の下でいとなまれる、家族相互の生活を前提に成り立っている。それがまして夫（父親）と妻（母親）、あるいは子供という個人単位の段階にまで、家族の分極化が進行するとすれば、もはや家庭も家族もこれまでの通念では推し測れない、いわば無家族家庭、あるいは無家庭家族の出現ということになる。事実、このような家族家庭の出現に対して、今日以後の社会変化を予測すれば、単なる絵そらごととして笑って見すごしてばかりはいられない。超高度産業技術社会は、いっそうますます必然的に、超軽量社会変動適応型、機能中心家族家庭、いわば大人を中心にみた、無家族あるいは無家庭型家族、子供無親の家族家庭の出現を要請するに違いないからである。このような傾向は後述するように、時代に伴う変化のあらわれとして、わが国においてもすでに顕著にみられはじめてきている。企業あるいは官公庁の転任などに伴う単身赴任による夫婦の別住、あるいは親子別居という例は日常ふつうになっている。また離婚の激増に伴う父（母）親のいない親子家族家庭、母親が働きに出ている母親不在の家庭家族の例などかぎりなくある。いずれの場合も大人を中心にした、大人のための家族家庭のありようであって、このような時代の傾向を、これをまたかつての子供中心の家族家庭型の時代から、大人の便宜優位の今日的家族家庭型時代への移行とみても同じことになる。いずれにしても時代の変化が、家族家庭のありようを根本から揺り動かし、家族家庭のありかたも、また時代の変化を反映して、激しく変わりつつあることだけは確かである。

以上が今日あるいは今日以後の家族家庭のありようであってみれば、これを子供を中心にみた場合には、子供の成長の不可欠な基盤としての家族家庭の消滅、家庭あるいは家族のいない子供世界への出発ということにもなりかねない。核家族化小家庭、あるいは親子夫婦個人単位の分極化家庭、そのほか父子または母子の離婚家族家庭の矮少化が、ただでさえ小さい家

族家庭に、大きな崩壊をもたらさないともかぎらない。今日、このような家族家庭と子供世界のかかわりを、しばしば家庭のない子供、あるいは家族を失った子供の時代と特色づけてみるのには十二分の理由がある。いずれにしても時代の変化に伴う新しい家族家庭の簇出は、時代の趨勢として当然であるにしても、その底辺につねに子供世界の危機の予兆がかくされているという点で、きわめて危険予告的であるといえる。

(二) **単身赴任家庭** 核家族化家庭の出現と軌跡を同じくして、今世紀六十年代以降にみられた特徴的な家族変動は、単身赴任家族家庭の簇生であった。単身赴任というのはいうまでもなく、すでに結婚して家庭をもっている夫婦のいずれかが、仕事の都合上長期にわたって、単身で任地に赴任することを指している。これを仮りに会社員や公務員の場合にあてはめてみると、例えば東京在住の会社員や公務員が、地方あるいは海外の任地に赴くにあたって、何らかの事情で妻(夫)や子供を残して任地に転住する場合ということになる。もちろん結婚していても、とくべつやむをえない事情がなければ、国の内外を問わず、家族全体で任地に行くのがふつうである。しかし何らかの事柄、例えば子供の教育上の必要とか、任地が海外でしかも家庭生活をいとなみにくい気候風土、習慣習俗上の著しい相違、このほか戦乱など治安上の保障がないという場合には、多くはほとんど夫(妻)だけが転住する。いずれにしてもこのような単身赴任の例は、今日では日常それほど珍しいことではなくなっている。いずれも今世紀六十年代以降における、高度技術産業社会の出現と、これに伴う経済成長期の社会変動が、その背景となっていることはいうまでもない。事実、このような社会変動を背景にした単身赴任の数は、労働省発表「雇用動向調査」によれば昭和58(1983)年には約14万人と推定されている。民間機関(労務行政研究所)の調査結果でも、家族のある転勤者のうち、ほぼ五人に一人が単身赴任であるとしている。このほか上述単身赴任家族家庭の場合とは別に、季節による一時出稼ぎ留守家族家庭という例もある。平松齊「単身赴任」によれば、

最近のこれら家族家庭の動向は、あらましつぎのようになっている。

出稼ぎ農民は、四十年代のピーク時には少なく見積っても30数万人（農林省推計）から60万人（労働省）、さらに一説には120万人（全国出稼者組合会）といわれる大量移動だったが、55年には農林省推計で13万余人、失業保険給付に基づく労働省推計では30万人に減った。一方単身赴任は58年にはざっと14万人と推計されるが、妻帯者で住居を移した転勤者に占める単身赴任の割合は、労働省が初めて雇用動向調査の対象項目としてとりあげた56年上半期の18.7%から58年には19.6%へとふえている。民間調査機関の調べでも、対象企業の50%がここ二、三年の増加傾向をみとめ、家族もあり家庭もある転勤者のうちほぼ五人に一人が単身赴任していると報告している。これに海外への単身赴任を加えるとさらにその数はふえるだろう。貿易取引、対外直接投資がふえるにつれて、企業の海外支店、現地法人や合併企業が海外各地に広がり、さらに生活環境のきびしい中東、アフリカ各地にプラント輸出に伴う建設、据付工事に派遣される技能、技術者が急激にふえているからだ。そして単身赴任の増加は、さまざまな問題を顕在化させ、それを一つの社会問題にした。

以上このような単身赴任、あるいは季節的一時出稼ぎ家族家庭の場合でも、いずれも赴任や出稼ぎする本人にとってはもちろんのこと、残された留守家庭家族に対しても、はかり知れない深刻な影響をあたえる。このような留守家庭家族、とりわけこれを子供の側からすれば、例えば父親不在の片親家庭は、父親のいない母子家族家庭同然になる。ふつう子供は子供の年齢にもよるが、日常ふだんの生活のなかで、父親から直接間接に多くのことがらを学び教えられている。事実、子供は家族の一員として、父親とのかかわりのなかで、慣習になじみ習慣を形成し、ものの考え方や感じ方、行動の仕方や生き方についてまでも身につけていく。また父親はとりわけ母親が主婦で家庭にいる場合には、外界と触れるのぞき窓の役割もしている。このほか子供の性格性向の形成という場合でも、父親欠落の影響は果しなく大きい。そのことは前出同書「単身赴任」における、つぎの引用にてらしみてもわかる。

残された家族には別居のひずみがさまざまな形で現われてくる。子供にとって

の父親の不在は、家族のもつ教育機能の欠落を意味する。子供は家族との日常生活の中で両親の態度や行動を見ながら、いつしか基本的な行動様式を身につけ、性格を形づくり、思想や美的感覚までも培っていく。とくに父親は外界に開かれたチャンネルであり、父親を通じてより広い社会のさまざまな関係をどうつくり、どう適応していくかを学ぶ。また両親そろってこそ男性と女性の役割分担や愛情の交換の大切なことと、その形を身近に体得することができる。その父親の不在は、子供のパーソナリティ形成に何がしかの影響を及ぼさずにはおかない。ことに進学を控えた中、高校生は思春期のきわめて微妙な成長過程にある。しかもこの年代の子供をもつ父親の単身赴任が最も多い。表面には現われない子供たちの思春期の心身症や反抗、異性問題から登校拒否、暴力、さまざまな非行、そして父親不在で必要以上に過敏となった母親との争いや、異常に濃密化した母子の近親相姦まで、単身赴任家族の深部の悲劇が時折り、カウンセラーや精神医のいのちの電話からもれてくる。

時代の変化を反映して、今日では前節繰り返しみてきたように、とりわけ都会においては、社会適応型家族家庭、いわば時代の変化に適応しやすい、身軽な流線型核家族家庭がふつうになっている。もちろん核家族化家庭の背景のなかには、すでにみてきたように若い夫婦が、夫または妻の両親と同居を好まない、複合家族家庭からの離脱という、自由願望が動因となっていたことも事実である。いずれの場合でも今日の家庭は、単に核家族であるにいうだけでなく、上述単身赴任家族家庭、あるいは出稼ぎ家族家庭の分裂家族のように、これまでの家族家庭の概念では測り切れない形態の方向へと変貌しはじめている。この変化をかつての時代の家族家庭の崩壊とみることもできれば、また今日および今日以後の新しい家族家庭の出現、あるいは幕明けとみることもできる。いずれにしても家族のいない家庭、または家庭をもたない家族、いいかえれば家族分裂型家庭の傾向は、押しとどめえない時代の流れであることだけは確かである。

(三)離婚家族家庭 このような時代の動向を反映して、上述核家族家庭や単身赴任家族家庭と同じ、もう一つの分裂型家族家庭は、夫婦の離婚によって出現した父(母)子分裂型家族家庭である。事実、今日、夫婦の離婚や別住は、結婚がきわめて日常的であるのと同じほど、それほど珍しいこと

ではなくなった。しかも離婚や別住話は、かつての時代においては、ふうう夫の側から一方的に出されることが多かったが、しかし今日では妻の側で夫を棄てる時代とまでいわれるようになった。その背景になっているのは、女性の側における自覚はいうまでもないが、よりそれ以上に、社会的あるいは経済的方面をふくめて、女性の離婚や別住を可能にする時代の変化が大きく作用している。こうした傾向はかつて以前の時代においては、おそらく到底通常考えることのできないはずのものであった。とりわけ往昔における大家族制家庭のもとでは、結婚も離婚もともに当事者の意志だけでは決められない、家長の自由裁量に委ねられていた。時代の趨勢がこのようなものであってみれば、結婚が家長の承認を必要としていたように、離婚にあたっても家長の承諾なしには許されなかった。たしかにかつての時代においては、離婚は夫婦双方の愛情や意志とはかかわりなく、家風にあわないとか、家族との折り合いが悪いとかの理由だけで、家長の意のままに妻または夫が一方的に家を追われたりした。つまりかつての家長制度の時代においては、結婚に自由がなかったように、離婚にもまた自由が認められていなかったということである。とりわけ女性の場合には、自分の意志だけでは、どうにもならなかったことのほかに、社会的偏見や経済的事情など、二重三重の制約があった。またこのほか「子は夫婦のかすがい」という諺もあるように、よほどの事情がある場合でも、子供を残して家を出ることは多くの場合、母親にはなかなかできないことであった。

しかし今日では結婚が自由であるように、離婚も別住もまた自由という社会的市民権を獲得した。最近ではわが国でも、年間約17万組（昭和59年）34万人の夫婦が離婚している。夫婦に子供がいた場合、子供を父母いずれかが引きとって養育するかという親権も、子供の年齢によっても異なるが、母親がとるという例も多くなっている。「子は夫婦のかすがい」（子供は夫婦の絆）という諺は、かつての古い時代のことであって、父（母）親が子供を残して、自分から家を出ていくという例も常識になった。時代の変

化がひとの意識に影響をあたえ、ひとの意識が時代の通念を変革した結果である。いずれにしても今日では、離婚は恥かしいものでも暗いイメージの伴うものでもなくなった。たしかに結婚が人生の一つの選択であるとするれば、離婚も本来もう一つの人生の選択であると考えざるべきのものである。結婚だけがいつも幸せで、離婚はつねに不幸であるなどと決めてかかる必要はない。事実、慶ぶべきはずの結婚が不幸に終わり、悲しむべきはずの離婚が、幸福への始まりという例はいくらでもある。人生への第一歩は、人生であればこそ、何回でも幾回でも繰り返すことができ、時には幸福からだけでなく、不幸や絶望からですら、出発可能と考えるべきである。人生はドラマあるいは自分の生き方の劇場舞台であるということは、離婚の場合にも同じようにあてはまる。今日的時代においては、結婚がそうであるように、離婚もまた終わりなのではなく始まりなのである。そのことは例えば「出発としての離婚」(佐藤良吉「子供と生活」所載)など、つぎの引用をみてもわかる。

ものごとにはいくつもの面があるとよくいわれます。何ごとによらず、ものをみたり考えたりする場合、いろいろな角度からみたり、考えたりすることの大切さをいったものだと思います。結婚や離婚について考えてみる場合でも、このことは同じであって、結婚はいつでも幸せで、離婚はつねに不幸だなどと、きめてかかる必要はないと思います。事実、結婚にも幸せな結婚もあれば、不幸な結婚もあります。離婚にも不幸な離婚もあれば、幸福につながる離婚があってもおかしくないはずです。……ここで離婚の場合だけについて考えてみますと、例えばすでに結婚していたとしても、夫婦の折り合いがうまくいかないとか、性格が違いすぎるとか、そのほかいろいろな理由で、四、六時中争いごとがたえないという場合には、離婚した方がよほどましということになるかも知れません。またよくきく話ですが、一つ屋根の下に住んでいても、おたがいの愛情が冷め切ってしまっているとか、形は夫婦であっても、夫婦の絆は切れてしまっているということもあります。こういう場合は法律的には夫婦でも、たがいの縁はなくなってしまうともいえます。……夫婦に子供がいたとして、子供の立場でも、親子同じ家庭に住んでいても、両親に争いごとが絶えなかったり、親が子供をかえりみてくれないという場合には、子供にとって幸せな状況とはいえないでしょう。こんな場合の夫婦の離婚は、事柄の程度にもよりますが、夫婦おたがいにとっても、

子供にしてみても、いちがいには不幸であるとばかりはいえないと思います。

とはいっても離婚や離別を、いつでも気軽にしてよいということをいっているわけではありません。離婚や離別は、夫婦にとっても子供にも、これまでの家族家庭の終焉を意味します。しかも離婚はたいていの場合、子供とは無関係に、大人の都合できめられることが多いと思います。その意味では大人中心で、子供無視です。子供の年齢にもよりますが、とりわけ幼ない子供の場合には、意見もいえないければ、考えも述べられません。よいにつけ悪いにつけ、否応なしに子供はただ結果だけをうけとるほかありません。しかしここでもものごとには、いくつもの面があるということを、思い出してみるのも悪いことではないと思います。人生はただ一度だけ、繰り返えしはできないと考えるより、人生であればこそ何度でも、幾度も繰り返えすことができると考えてみたらどうでしょう。結婚が人生の新しい出発であるとすれば、離婚もまたもう一つの人生の始まりであることになりは変わりはありません。夫や妻にとって新しい旅立ちであるように、子供にとっても同じだといえます。しかもその出発は、幸せや希望からだけではなく、不幸や絶望からですら可能なはずで……。人生にこれで終わりということはありません。このようなものの一面から考えてみますと、離婚もまた十二分に、またもう一つの希望への上りということになりそうです。……いずれにしても離婚もまた時代の変化の影響をまぬかれることはできません。離婚はすでにこれまでみてきたように、これまでの家族家庭の解体を意味しますが、しかし同時にまたそのなかに新しい家族家庭の萌芽を内包しています。この意味でいえば、離婚家庭はこれまでの家族家庭の崩壊とみられる以上に、今日および今日以後の新しい家族家庭の誕生、あるいは出現とみることができるようになります。……いずれにしても時代の変化は離婚家族家庭についても、また私たちに新しい時代における認識の覚醒を促しているように考えられます。

以上このような家族家庭の有様について考えてみると、新しい時代における家族家庭の背後に、時代の変化が大きく作用していることに気づく。時代の変化は否応なしに、人びとの通念や価値観をつくりかえ、家族家庭のありようについても、つぎの時代に適合する家族家庭の出現を促す働きをしているのである。しかし結婚が自由であるように、離婚もまたどれほど自由であるからといって、大人中心の大人の都合だけで、いつでも離婚をしてよいということにはならない。とりわけ夫婦に子供がいる場合には、離婚の結果のよし悪しに関わらず、子供におよぼす影響ははかり知れない。

この点でみるかぎり離婚は夫婦にとって人生の大事であるように、子供にとってもその意味は同じである。

いずれにしても離婚は、過去の家族家庭からの離脱、あるいは解放ということであるが、それ以上ここで重要なことは、離婚が大人と子供をふくめた新しい未来世界への旅立ち、もう一つのつぎの時代における家族家庭の創造を意味するという確信と認識である。いうまでもなく離婚という事実は、結婚がそうであったように、過去のいつの時代においても数かぎりなくなされてきた。しかし上出今日と今日以後の離婚は、単に過去の家族家庭の精算という以上に、より次代における新しい型の家族家庭形成の出発点、あるいはその契機を内包しているという点において、明らかにかつての時代の離婚とは意味を異にしている。つまり今日以後の時代における離婚は、単なる終着点なのではなく出発点であるといことである。その背景になっているのは、まぎれもなく時代の趨勢、今日的時代の大きな変化であることはいうまでもない。いずれにしても以上このような時代の変化を背景に、大きく様変わりしつつある家族家庭、例えば家族のいない家庭や、家庭をもたない家族のありようが、子供と子供世界にはかり知れない影響をもつことだけは確かである。

(4) 子供世界の病理

(一)病理の時代 以上これまで繰りかえしみてきたように、今日、大人と子供世界は、時代の変化の直撃をうけて激しく様変わりしつつけている。事実、例えば上述中世年代農耕生産社会の場合には、子供は小さい大人として取扱われて、子供相応の労働(仕事)を分担していた。この時代はこの意味で、子供がいまだ子供として認められることのない、いわば子供のいない大人だけの時代であった。それが近世に至り、初期工業あるいは商業通商産業化社会が出現すると、子供(年少者)は生産労働力の必須の条件ではなくなり、結果的に子供は小さい大人から、年少者としての子供の地位

を獲得した。この時代がしばしば子供世界の誕生、あるいはこれに伴う子供を子供として保護する、子供保護思想の讓成期とみられるのもこのことと関係している。以上このような傾向は近代に至るといっそう増大し、とりわけ20世紀初頭以降、Ellen Key (1826-1926) のいわゆる「児童の世紀」(「The Century of the Child」原田実訳)、あるいは Jhon Dewey (1859-1952) の児童中心主義教育 (child centered education) 思想の昂揚期をむかえた。

子供世界はこのように、それぞれの時代に伴う変化を背景に、著しく相貌を変えながら今日に至っている。今日この時代はすでにみてきたように、大人と子供世界の混合錯雑社会の時代であるといわれている。このことはかつての時代に大人と子供世界を区別していた障壁、あるいは境界が、時代の変化(衝撃)によって崩壊し、西欧中世期社会の場合とは異なる、大人と子供の混在一つ世界の再来を意味している。いいかえれば今日このような時代は、子供にすれば否応なく大人の錯雑社会のなかで、むき出しのまま生きるほかない不安、不確実性の時代ということになる。今日、しばしば病理の時代といわれる理由も、以上の時代の変化と無縁ではない。

(二)準備時代の病理 時代の背景(病理)がこのようなものであってみれば、子供であるからといって、かつての時代のように、ひたすら子供性を深め、「黄金の子供時代」を享樂していさえすればよいというわけにはいかない。大人もまた大人で、子供を子供時代にとどめて、子供本性の成熟深化を待つという余裕はなくなる。この錯雑社会のなかで、子供を生きのびさせようとすれば、子供を子供世界に閉じこめて、ただ手をこばねているというわけにはいかなくなる。むしろその反対に、一年でも半年でも一箇月あるいは一週間、また一日一時間一瞬をすら争って、子供をいち早く大人に仕立てる準備を急がないではいられないということになる。子供を成長(発達)という息の長い射程のなかでとらえ、子供期を深めて子供生命を養う以上に、日常山積みされた目前のことがらを、まず何よりも優先してさせないわけにはいかなくなる。子供本性を適度に保護し、子供を子供にま

で成長させることよりも、子供本性を犠牲にしてすら、子供を大人あるいは大人の同伴者へと駆り立てないではいられなくなる。今日、子供がしばしば「追いつめられている子供たち」(Rochefort; 「Les Enfant d'abord, Grasset」西川祐子訳)とみられ、「急かされる子供たち」(Elkind; 「The Harrid Child」久米稔訳)といわれるのも当然のことである。今日、この時代を特徴づけて、子供を大人に向って駆り立てる、拙速準備の病理の時代といっても、それほどいいすぎとはならない。そのことは例えば Elkind が前出同書のなかで、子供たちはあまりにも「成長を急かされすぎている」(growing up too fast too soon)として、つぎのように述べているのをみてもわかる。

児童期という時期について抱く観念は、伝統的な生活様式を維持する上でこの上なく重要であるが、この観念が、我々が創り出した今日の社会において、いまや消滅寸前の状態になっている。今日の子供たちは、好むと好まざるとにかかわらず、抵抗しようのないストレス——面食らってしまうほど急激な社会変化や、絶えず高められていく期待などがつくり出すストレス——の犠牲となっている。現代の親たちは拮抗し合う諸要求、過渡的な社会状況、役割の変化、個人面の不確実性や職業面の不確実性、などが存在する圧力ガマのような中で生活している。そして、父親あるいは母親はこれらの面に関しては、ほんのわずかに注意を払っているだけである。我々は機会さえあればできる限りストレスから解放されようと努めており、我々がたいていいつもこの面で統制できる唯一の、確実な生活領域は家庭だけである。……中流階級の子供たちを早く成長するように仕向けている今日の諸圧力は、児童期の初期から努力を発している。それらの圧力のうちで主なものは、知的な面で早くから優秀さを発揮するよう求める圧力であり、これは、早熟に対する見方が変わって出てきた圧力である。数十年前までは早熟は非常に疑問視されていた。神童は神経質な大人のように考えられていた。そこで、「早く熟すれば、早く腐る」という言葉が、存在するほどであった。子供の学業面の技能の習得を早めようとすることは、悪い親が考える方法の証拠のように見られていた。……しかし、親たちのそのような態度は、早くから学習することの重要性についての専門的、半ば専門的な意見が出て、親たちが衝撃を受けた1960年代に著しく変化した。幼いころから子供を教え込まないと学習のための最適の機会が失われてしまう、と親たちは聞かされた。今日、税金で賄われている幼稚園がほとんど全州で開設されており、子供たちは、しだいに低年齢から入園を認めら

れるようになってきている。(多くの都市では、一月一日以前に生まれた子供は実際の入園年齢は四歳となっているが、その前の年の九月に入園できるようになっている。) いったん幼稚園に入園すると子供たちは、後の学年で習うようになっている読書や算数を正規の形でそれ以前に勉強してしまうというケースが今日では多くなってきている。……早く成長するよう求める圧力に関するもう一つ別の証拠は、子供たちのための夏期キャンプの計画面の変化である。水泳、帆走、乗馬、洋弓、キャンプ・ファイアー——これらは、我々の子供時代から思い出す活動であるが——を提供する夏期キャンプは今でも数多く存在するが、しだいに多くの夏期キャンプが、外国語、テニス、野球、ダンス、音楽、そして、コンピューターまでも含めて多くの多種多様な領域の専門的な訓練を行う形のものになってきている。……夏期キャンプの計画面での変更は、児童期の数年間を、楽しむだけの活動に参加させて浪費すべきではない、という新しい態度から出てきたものである。しかし、むしろ児童期のこの数年間は、大人と同じ技能や能力を完成させるために使われるべきである。子供たちは早くから大人の競技の持つ厳しさを教え込まれている。子供たちのための競技的スポーツは、より一層広がりつつあり、野球のリトルリーグからホッケーのリトルリーグまで、すべてが含まれている。子供たちを、統制のとれた競技的なスポーツに、キャンプや家庭総ぐるの形で参加させようとする圧力は、今日の子供たちに、早く成長するよう求める最も明白な圧力の一つとなっている。……子供たちは時間をかけて成長し、学習し、発達していく。……子供たちを、大人を扱うのとは違った方法で扱ったからといって差別待遇していることにはならず、むしろ、子供たちが持っている、子供であるがゆえの特別の財産を認めていることになるのである。すべての子供は、大人に対応するものとしての、子供独特の諸欲求——知的欲求、社会的欲求、感情的欲求——を持っている。子供たちは大人と同じ方法で学習したり、考えたり、感じたりはしない。これらの違いを無視すること、すなわち子供たちを大人のように扱うことこそ、実際には民主主義的でもなければ、平等主義的でもないのである。

(三) **学校教育の病理** 学校教育のありようや、学校教育に伴う子供世界の病理について考える場合でも、時代における変化の背景をぬきにしては、正しい理解は深められない。このことはいいかえれば、今日学校で起りつつある子供世界の病理は、何一つとして時代の変化と無縁なものは存在しないということである。事実、仮りに今日の時代をすでにみてきたように、準備拙速時代と特徴づけてみた場合、今日、学校での子供世界のできごと

は、ことごとく時代の変化を底流とした、表層における噴出にすぎないことがわかる。たしかに今日、時代の変化は、前述繰り返してきてきたように、大人と子供を否応なしに準備万能の方向に追いつめている。この傾向は生活一般の分野においてだけでなく、学校教育の場合でも例外ではない。そのことは例えば学校の教室の授業にあてはめて、その実態に則して考えてみればよくわかる。事実、小学校の場合についていえば、算数や国語、理科や社会などの教科はもちろんのこと、絵や制作(工作)、そのほか音楽や運動の時間までが、ひたすら見境いもない準備と訓練、詰め込みと暗記のために費やされている。この傾向は中学や高等学校の段階では、受験準備偏重と結びついていっそう増幅されている。このことは教師の側からすれば、教え切れないほど山積みされた教科内容を、準備のためには詰めこむ(注入)以外にないということであり、子供の側からすれば、際限もない授業内容をうのみに(暗記)するほか方法がないということである。しかもそれが準備第一優先のためであってみれば、学習本来の意味はともかく誰でもが例外なく、早く上手に間違いなく一つ答えを求められて急かされることになる。ここでは出来るということだけが認められ、間違ふということとは許されない。上手ということだけが優れたこととされ、下手なことは劣っていることとして蔑げすまれる。早いということが至上と考えられ、遅いことは落伍を意味する。学校教育が硬直、固定化し、形式的権威主義に墮落し、学校が結局子供の選別と差別の場に転落するとしてもあたりまえということになる。一事が万事、学校教育のありようが、このように準備万能の拙速時代の病理に蝕ばまれているとすれば、親はもちろん学校の教師までが、いっそうますます知らず知らずのうちに、準備拙速主義の落とし穴に転落することになる。そのことは例えば「学校教育の病理」(佐藤良吉「子供と生活」所載)など、つぎの引用をみてもその一端がわかる。

今日、この時代を特徴づけて、拙速準備の時代とよぶひとがいます。たしかに今日の激しい時代の変化を考えあわせてみますと、この見方には十分うなづかせ

られる理由があるように思います。……時代が仮りに、このような流動変化の準備の時代であってみれば、大人が子供にしてあげられることは、子供にこの時代を生きのびさせるための準備しかないと考えたとしても、それほど不自然なことではありません。子供に「黄金の子供時代」を体験させ、子供らしさの肥沃な土壌を培うことなどよりも、一刻一瞬を争って、目の前の準備を急ぐことの方が、より大切と考えるのもむりからぬことです。時代が時代であってみれば、万事が万事、日常茶飯のささいなことがらをふくめて、子供を大人あるいは大人の同伴者に仕立てる、大人へまでの準備をしないわけにはいかないからです。

以上のことは学校教育の場合にも、まったく同じようにあてはまります。仮りにそれを学校の授業に重ねあわせてみますと、いっそうはっきりします。小学校では、算数や国語、理科や社会などの山積みされた授業を、教える(注入)ことだけに没頭しています。すべてが準備のためです。準備が目的ですから、「感じ考え、生活(行動)する」ことへなどの指導や、輝いて生きる体験などへの配慮をしている暇はありません。これでは子供の側からすれば、まるで空から降ってくるとしか思えないほどの山積みされた授業、地から湧き出てくるとしか考えられないほどの宿題に、朝から晩まで追いたてられることになります。しかしこの程度のこととは、親や学校の教師をふくめた大人の側からすれば、準備のためには子供には何が何でも、やってもらわなければならないということになります。こんなことぐらいでしごみするようでは、今日の時代を生きること、大人にもなれないと大人は考えます。……準備は学校の授業だけではありません。学習塾へも体操教室にも、水泳や音楽教室へはもちろんのこと、夏休みや冬休みには、キャンプやスキーにも行かなければなりません。準備のためには仕方がないことです。……音楽や絵、あるいは運動にしても、音のリズムを楽しんだり、絵をかいて心を和ごやかにしたり、運動をして生命の躍動を感じたりしている暇はありません。そんなことをしていたら、ただでさえ少ない準備の時間がなくなります。子供にそんな時間を許すわけにはいきません。許すとしても感性を深めたり、美を感じたりということのためではありません。むしろそれとは縁遠い、音楽や絵や運動が誰かよりも、上手によくできるようになる準備のためです。……ここではその意味では、ともかくも覚えて忘れないこと、上手に早く間違いなくということが目的にされます。忘れることは許されません。下手では蔑げすまれます。間違っただけは点はもらえません。遅ければ急がされます。出来なければ罰せられます。学校の教育はこうして、準備のための手段となり、競争の道具に転落してしまいました。……この学校教育を浸し切ってしまう考えは、授業の場合だけでなく、学校生活のあらゆる方面にまでおよんでいます。子供か友だちと遊んだり、話したり、とびまわったり、かけたりする子供の生活の日常といったところにまで押しよせてきています。事実、子供の遊び、例えばかけっこや泳ぎでも、おに

ごっこや凧あげでも、まりつきやなわとびでも、そのほかかくれんぼや砂遊び、虫とりや魚つりまでが、上手に早く間違いなくできるということだけが、よいことだというようになってきています。まして子供は泣いてはいけません。ひとり遊びは許されません。はにかみや温和すぎてはいけません。お弁当（給食）は残してはなりません。忘れものをすれば罰をうけます。……時代の傾向がこのようなであってみれば、そうならないための準備を急がないわけにはいきません。親は自分の子供にだけは、損をさせたくはありません。教師は自分の学校（学級）の子供を、他の学校（学級）の子供に、負けさせるわけにはいきません。……これでは子供心と体の自然リズムが、損われるのはあたりまえです。しかしそんなことを考えている暇はありません。子供の輝くような内部生命の躍動など、準備のためには惜しげもなくすて去って悔いませぬ。準備が目的で教育は手段に墮落した結果です。……これが今日の学校教育の一般であってみれば、子供らしさ（自然）がゆがめられ、生命が萎縮し、活力を失ってしまうのはあたりまえのことです。教師と仕事に対する親しみがなくなり、友だちと交わる楽しさが感じられなくなり、生活に対する意欲が衰えるのはあたりまえのことです。子供が子供らしくなれないだけでなく、将来大人になることもできません。……準備万能の拙速主義が子供らしさ（本性）を蝕む危険を、あらためて考えてみる必要があります。

事実、このように今日、学校における子供世界は、けっして明るい方向にむかって進んでいるといい切るわけにはいかない。むしろその反対に大人も親も教師も、その対応に手をこばねいて子供を見失っている間に、子供世界の深層の病理は一挙に表層に噴出はじめている兆候すらある。学校の現実が仮りにこのようなものであるとするなら、大人も親も学校の教師すらもが、いっそうますます根本の対策よりも、目前の手取り早い対応を急がないわけにはいかなくなる。理由がどうであれ、子供の自然本性（子供性）を置き去りにしてまで、結果的に準備万能の拙速主義の落とし穴に転落しないではいられなくなる。子供らしさを深め成長を促す契機としてならば、大量の知識や過重な教育も必要でないにもかかわらず、際限もない知識の詰めこみと、それに伴う暗記や訓練に没頭しないわけにはいかなくなる。これを子供の側からすれば、大量の知識をひたすらうのみにし、それを丸暗記する苦痛を忍ばなければならないことになる。学校に遊びがあり、遠足や運動会、そのほか音楽会や発表会、あるいはクラブ活動や自治

会活動などがあるとしても、これらの諸活動もせいぜい教師の準備（授業）のつけ足しか、準備目的の一部ということにもなりかねない。

以上が学校教育の全部でないまでも、深層にかくされた病理、あるいは表層に噴出した事実であるとするなら、輝くような子供生命の発現がみられるはずがない。今日、世上繰りかえし論じられているように、学校に行かない、あるいは行けない子供の群れ、怠学や暴行暴力などの子供の反乱、いじめっ子やいじめられっ子、また大人になれないだけでなく、子供にすらなれない子供の問題など、いずれも時代の変化と学校教育の病理とかかわりのないものはない。学校はこうして今日ますます子供自身とは縁遠い、子供の手に届かない無力な存在に転落しはじめている。子供の商品化や知識の多い少いかによる子供の値ぶみ化、子供のロボット化や手段化、そのほか学校教育の著しい硬直化や形式主義、没個性化や管理支配など、いずれもそのあらわれの一つにすぎない。しかもこれらの傾向は日常一般化して、学校教育のあらゆる方面に浸潤しはじめている。そのことは教室における授業だけでなく、つぎの引用のような卒業式（「画一化した卒業式」朝日新聞所載）など、学校行事の方面にもおよんでいる。

この春、私は二つの卒業式に出席した。次女の私立女子中学と三女の公立小学校だった。私立中学は、全員付属高校への進学が決まっているせいか、子供たちにも先生方にも別れのかたさはなかった。式の雰囲気はのびやかで明るく、卒業生代表の答辞は素直な言葉で父母席の笑いを誘い、決まり文句の味気なさに慣れていた私の耳には大変新鮮に響いた。それに引きかえ小学校はせき一つ聞こえない重々しい雰囲気の中で終始した。校長、教頭のおごそかな歩みは卒業生一人一人にも徹底していた。卒業生たちは拍手の中、曲がり角は直角に、一点をみつめたまま表情一つ変えずに入場、壇上で一人ずつ卒業証書を受け取る姿は絵にかいたように整然としていた。子供たちの極度に緊張した表情は、まるでぎごちないロボットのようなようだった。吹奏楽に送られて退場するロボットたちに、ロスオリンピックの日本チームの入場行進がダブって浮かんできた。晴れの舞台上で魂の自由を奪われてしまったような、あのスポーツマンたちと、この小学生たちの、あまりにも画一化された動きに同じものを感じたのだ。個性豊かに育ってほしい子供たちには、もっとおおらかで、のびやかで、子供たちの内なる声が聞こえるよ

うな卒業式こそふさわしいと思うのだが。

学校教育の病理が多かれ少なかれこのようなものであるとするなら、以上の傾向に対する批判や反省が生まれてくるのもまた自然のことである。そのことは例えば、つぎの「脱学校化」(「deschooling」山本哲士解説)など、学校教育からの離脱の試みにも、その一端がみられる。

脱学校(化)とは、近代産業文明を批判しつづける思想家イバン・イリイチの造語(deschooling)にあてられた訳語である。これは、イギリスの社会民主主義者イアン・リスターによって誰(いき)しもが語っていたことと一般化され、アメリカ合衆国の教育実践家ジョン・ホルトによってホーム・スクーリングへとユートピア化され、ブラジルの教育学者パウロ・フレイレによって、「学校がなくなるまでわたしは待ってられない」と一蹴(いっしゅう)された。学校信仰がことのほか根強い日本では、脱学校の学校をつくるのだと、進歩的な教育管理者の改革指針にさえされている。この数奇な運命は、あいまいな造語にあるというより、学校の世界体系が現在いかほど混乱しているかを物語っていよう。造語主イリイチ自身によって最も嫌われながら、しかし、いまだに本人によって書名の表題がかえられたわけではない。教育の自由化などの教育争いが、騒がしくなってきた日本で、「学校がない現実」は禁忌のように論じられない。教育そのものが悪であるという気づきは、なおのこと速い。しかし、よく自分自身をふりかえてみれば、「学校」や「教育」の現実を、誰も真底信用していない。学校のなかで改革をすすめる「リスクーリング」、学校から教育を切り離そうとする「フリー・スクーリング」、そして学校のない教育をめざす「ディスクーリング」の三つの流れは、いずれも学校化の変形である。脱学校化を必要としない社会こそが重要なのである。そこでは、子どもは学校へいかないことも選択できる。子どもは、学校へいきたいのではなく、仲間が集まれる場へいきたいのだ。親も教師も「教育を断て」ば憂いは消える。老子のいう「絶学無憂」で、学ぶ自律力を取りもどすこと。過剰な知識も、過剰な教育もいらぬ。学校という怪物だけでなく、教育尊重をも非神話化したとき、人類は新しいまれかわりへ歩んでいくにちがいない。教育が制度化された学校のなかで知識を伝達することと、古い世代が新しい世代へ文化遺産を伝達することとは違う。前者が強まるほど、後者の関係性が希薄になり、人々の対話的關係がなくなっていく。いま、教育への思いを断って、学ぶ＝遊ぶ自然態を考え直すときであろう。

以上このほか図書館や書店の本棚に並べられている、つぎのような教育

関係の図書をみてもわかる。

(1)いま学校で(朝日新聞社編)(2)教育の森(毎日新聞社編)(3)手仕事を学校へ(L'Ecole moderne Francaise freinet, 宮谷徳三訳)(4)先生がいない(染川光三)(5)何んのための教育か(村井資長)(5)教育に強制はいらない(大沼安史編)(6)あすへの学校(井上裕吉)(7)教育の原点を考える(藤原肇)(8)(学校が甦えるとき(有園格)(9)教育の原点をめぐる(黒羽亮)(10)よるべなき両親(和田修二監訳)(11)教育の荒野を拓く(婦人の友社編)(12)教育亡国(林竹二)(13)問題群としての子供(中村雄二郎)

(四)子供と生活 しかしそうはいっても学校や家庭での子供の生活が、まったく光のない闇の世界であるということではない。子供や親や教師も時代に伴う変化の圏外に逃れ去ることはできないにしても、なお確実に光のなかで生きているというのもまた確かである。子供や親や教師をふくめた大人も、時代の所産である以上、時代の変化の渦のなかで、不確実性の不安な時代を生きるほかないことは当然であるが、なお生命の輝きのなかで生きているという証拠はかぎりなくある。そのことは例えば、つぎの子供(小学児童)の作文によって、学校と家庭生活の一端をみてもわかる。

(1)わたしの学校 わたしのたんになの先生は、酒井国光先生です。とてもやさしい先生です。おこった時は、まるでかみなりみたいにかわいのですが、いつもはやさしいです。……クラスはいいクラスとばかりはいえないけどみんなたいへん元気です。……ほとんどの男の子の好きな科目は、体育です。たぶん考えたりくふうしなくても、いいからだと思います。女の子の好きな科目は、音楽です。それは音楽の先生がやさしくて、歌が楽しいからです。それにときどき、ビデオを見せてくれるからです。休み時間には男の子は、いつもやきゅうをします。女の子はフライとりや、ゴムだん、おおなわとびをしています。みんな元気で楽しい学校です。(龍千砂子)(2)てんらん会 わたしの学校では3月22日と23日の二日間、てんらん会をしました。三年生の出し物は、自分たちで書いた「手ぶくろを買いに」という本と、そのお話の絵でした。教室には紙でつくった鳥もかざりました。鳥を作るとき、カッターの切りこみがたいへんでした。……六年生はとてもおもしろい、ミステリーボックスを出しました。その中にはなんと、ねばねばしたなっとうが入っていました。お兄さんが「手をつっこんでみなさい。」といったので、わたしがしらずに手をいれてみたら、くさったみたいになっとうがたくさん

つきました。(荒井陽子) (3)ぼくのクラス ぼくのクラスの先生は、畑たえ子と言う名まえです。いつもニコニコわらっています。休み時間にぼくたちがサッカーをしていると、先生も「いれて」といってみんなです。……先生のシュートはゆるいので、キーパーの人にすぐとられてしまいます。休み時間がおわって二時間目の算数のとき、先生がけいさんをまちがいました。みんなが「まちがえた、まちがえた。」という、先生はしらけて、「それよりも学校にわすれものをするほうが、みんなにわられますよ。」といいます。……きゅう食の時には、ピアノをひく友だちがいて、ドレミのうたや、いろいろなうたをうたいます。そんな日が毎日つづいたら、ぼくはいいなあと思います。(中島一人) (4)学校 ぼくの学校は、文京区のなかでとても有名です。ぼくはわけはわからないけど、ぼくの名まえを、学校の先生で知らない先生は一人もいません。給食は早くたべるので、ぜったい一番か、十番までにははいります。一年から六年生まで、ともだちがたくさんいます。……ぼくのたんになの先生はおもしろい先生です。でもわすれ物をする、鉄のぼうでおしりをぶちます。先生と「ことわざがっせん」をしました。「さるも木からおちる」とか、「こうぼうもふでのあやまり」とか、たくさんいうきょうそうです。ぼくは先生が「もっとたくさん思い出しなさい。」とせかすのでこまります。……体育では男たい女でサッカーをします。ぼくの学校はとても楽しいです。(山田大軸) (5)先生 ぼくの先生は三浦先生です。いつもニコニコしています。べんきょうのときは、ふざけるとおこります。先生は算数の先生で、算数がとくいです。でも国語や社会も、くわしくおしえてくれます。……休み時間にぼくたちは先生とおいかけっこをしてあそびます。そうすると先生はだれも入ってはいけなと、とめられているところにかくれます。それで「いけななんだ。いけななんだ」というと、「しつれいしました。」といって出てきます。そうしてこんどは先生がみんなを追いかけてきます。それでぼくたちがあやまります。先生はゆるしてくれます。……先生はしかってもすぐそのことをわすれてしまいます。とてもわすれっぽい先生だと思います。(蛭原久敬) (6)わたしの学校 二月ごろ学校で「ゆうびん局で働くひと」のことをなりました。そのとき赤坂ゆうびん局に見学にいきました。そうしていままでわからなかったことをべんきょうしました。……お友だちやみんなが出したおてがみは、ゆうびん局のおじさんがあつめにきます。そしておてがみやはがきはポストから、ゆうびん局にはこばれてきます。それから大きいのと、小さいのに分けてから、じどうおういんき(スタンプをおすきかい)にかけます。そのあとはいろいろなきかいにかけたり、人が区分けします。わたしはたいへんだなあと思いました。……ゆうびん局についてわたしの知っていることはたくさんあります。……日本からアメリカにおくる手がみは、ひこうきではこばれていきます。東京からはなれた島には、港から出る船ではこびます。がいこくに出すときは、エアメールというふうとうを

つかいます。……わたしたちの学校はとてもたのしいです。(石川薫子) (7)おばあ
ちゃまの病気 この前へんな電話が二回ありました。一回目のときはハァーハァーと
いうくるしそうな声がしました。ぼくはいたずら電話だと思ったので、すぐ切っ
てしまいました。二回目のときは体をどこかにぶつけた音と、一回目と同じハァ
ーハァーというくるしそうな声がしました。その電話がかかってきたつぎの日、
ぼくが学校から帰ってくると、おかあさまが泣いていました。わけをきくと「お
ばあちゃまがたおれたのよ。」と小さい声でいいました。ぼくはその話をきいて、
「ぼくにあんなにやさしくしてくれたおばあちゃまがたおれるなんて、信じら
れない。」と思いました。そのばん病院におみまいに行きました。おばあちゃまは
さんそマスクをしていました。……ぼくは思わず外へ出ました。なぜかという
おばあちゃまが、あんなすがたになっていたからです。その夜はねむることがで
きませんでした。きのうの電話はきっと、おじいちゃまもおばちゃまの家族も、み
んな外出していたので、ぼくの家にたすけをもとめてきたのではないかと思いま
す。ぼくはそれを思うと、いまでもむねがいたくなります。(北川淳一郎) (8)(+)真夏
息をつく／暑い空気が、胸いっぱいになる／真夏の温度は35度ぐらい／私のか
らだはとけていきそう／どこにいても、あーつーい。(+)けんか ごめんね、ごめん
なさいとあやまっても／許してくれないお友だち／何んていえばいいのかな／許
してください、ごめんなさい／いろんな言葉で、言ってみようかな。(松崎名央)

教師の場合についても、以上のことは同じようにいえる。時代の変化に
翻弄されて、いま目のまえに、いま手のとどくところにいる子供たちにつ
いてすら、危く見失いがちになる教師がいる反面、子供らしさ(子供性)と
深くかわり、子供を光のなかで確実に育くんでいる教師もまた少なから
ずいる。そのことは例えば異色多彩な教師小沼和(東京城山小学校長)、「光
のなかの子供」(「いしずえ」所載)など、つぎの引用にてらしてもわかる。

(1)光のなかの子供 今年(1977)は天候が不順で、季節感の乏しい日が続きました。しかし
子供たちの学校生活は、不順な天候とは対照的に活気に満ちて、学習に運動に精
力的にとりくんできました。こうして心身ともに健康を養い、自信を身につけた
子供たちは、夏の光のなかで、さらに自分を鍛えるべく意欲を燃やしています。
七月になると不順な天候をくつがすように、一気に夏が訪れました。ギラギラ輝
く太陽に照らされた校庭は白く乾いて熱を帯び、地上が燃え立つような日もあり
ました。樹々の緑は黒みをまし、枝を伸ばし葉を茂らせ、樹影をつくって夏の樹
らしくなりました。……太陽に照りつけられる校庭とプールには、猛暑をはねか
えすように、子供たちの光に輝く生命の音がしています。躍動と歓声とは光のな

かに生きる子供らしさ（本性）の現れです。成長してやまない子供たちは、何よりも光がすきです。私は今日の暗い錯雑社会のなかで生きるほかない子供たちを思いみる時、それだけいっそう、光のなかの子供を深くみつづけていきたいのです。

(2)秋の光 秋の終わりごろの景色は透明で輝いてみえます。校庭をとりまく樹々の紅葉は、晩秋の陽光に映えて清楚な光彩をはなっています。そしてやがて木枯が吹き、枯葉が舞い落ちて、大地は錦繡におおわれます。耳をすますと枯葉の触れ合う音が物悲しく、冬の間近いことを感じさせます。……晩秋の和やかな午後のひと時、秋の光のなかで遊びに興じている子供たちをみていますと、知らず知らず子供世界に引きこまれていく自分に気づくことがあります……白い歯をむいて迫ってくる時代の波濤と、このかぎりない光のなかの子供世界をあわせ考えながら、自分のいたらなさや自己嫌悪を感じたり、あらためて子供たちへの期待をよびさまされたりしています。

参 考 文 献

- (1)原田実 人間形成の明日 (2)中山一義 日本教育史 (3)Rousseau,: *Émile ou De L'Éducation*, (「エミール」押村襄訳) (4)Fröbel,: *Die Menschenziehung*, (「人間の教育」荒井武訳) (5)Ellen Key,: *The Century of the Child*, (「児童の世紀」原田実訳) (6)Dewey,: *Experience and Education*, (「経験と教育」原田実訳) (7)Comenius,: *Didactica Magna*, (「大教授学」稲富栄次郎訳) (8)M. Montessori,: *Education for Human Development*, (「人間らしき進歩のための教育」周郷博訳) (9)子安美知子 魂の発見 シュタイナー学校の芸術教育 (10) *Waldorfpädagogik in öffentlichen Schulen*, (「授業からの脱皮」子安美知子監訳) (11)鈴木秀男 幼児体験 母性と父性の役割 (12)原田実 ヨーロッパ近世教育思想史 (13)Ulich,: *History of Educational Thought*, (「教育思想史」松浦鶴造訳) (14)Marie Winn,: *Children without Childhood*, (「子ども時代を失った子どもたち」平賀悦子訳) (15)Toffler,: *Future Shock*, (「未来の衝撃」徳山二郎訳) (16)Toffler,: *The Third Wave*, (「第三の波」徳山二郎監修) (17)Coveney,: *The Image of Childhood*, (「子どものイメージ」江河徹監訳) (18)Ariés,: *L'enfant et la vie Familiale sous L'ancien regime*, (「子供の誕生」杉山光信訳) (19)Gusdorf,: *Pourquoi des Professeurs*, (「何のための教師」小倉志祥訳) (20)堀尾輝久 子どもを見なおす (21)Rocheffort,: *Les Enfants D'abord*, (「追いつめられた子どもたち」西川祐子訳) (22)加藤秀俊 子ども文化史 (23)石川松太郎編, 日本の子どもの歴史 (24)小此木啓吾 家庭のない家族の時代 (25)三浦修吾 生命の教育 (26)Elkind,: *The Hurried Child*, (「急かされる子供たち」久米稔訳)